



北の縄文

HOKKAIDO JOMONCLUB NEWSLETTER

2024 Summer Vol. 32

CONTENTS

- P1 巻頭ごあいさつ
- P2-4 インタビュー・警田亜紀子さん
- P5 トビックス・お知らせ
- P6-7 道庁からのお知らせ
- P8 会員情報、編集後記

巻頭ごあいさつ



北の縄文道民会議 副代表 藤井 裕

北海道経済連合会 会長
北海道電力 代表取締役会長



2024年4月20日 道内初の国宝「中空土偶・茅空（カックウ）」を発見した小坂アエさんが亡くなられた（享年91歳）。カックウに「めんこいな」と愛情たっぷりに笑い、2007年に国宝になった際も「出世してよかったな」と我が子を思うようなコメントが微笑ましく、小坂アエさんのお人柄がひしひしと伝わる。改めて小坂アエさんには道内初の国宝の発見と縄文遺跡群が世界文化遺産になる契機をもたらして頂いたことに、心より感謝申し上げるとともにご冥福をお祈り申し上げます。

カックウを見ると当時の縄文人の生活に思いを馳せる。春は長い冬から目覚めた動物や木、花とともに陽春の柔らかい陽ざしに歓喜し、夜には祖先の霊を祀り、新しい季節を迎えられたことに感謝していたのではないか。夏は集落の人々で力を合わせ土木作業に勤しみ、広場では子供が狩猟の練習をしていたのではないか。秋は山々から流れ出す豊富な水流に遡上するサケを捕獲し、色づく山々で木の実やキノコを採取し、長い冬に備え冬支度に追われていたのではないか。冬は竪穴住居で土器をつくる。きっとオシャレにも気を遣い、貝殻や動物角で耳飾りや首飾りのアクセサリーをつくり、遠い春の到来を待ちわびていたのではないか云々。夢が止まらない。

ただ、そうした争いのない元祖 LOHAS※ともいえる安定した生活が1万年以上に渡って続いたということは、この豊かな北海道の大地と海がもたらした恵みがあったからこそと、改めて実感する。

そして21世紀の今日、果たして現代人は縄文人より豊かな生活を送れているのだろうか？

テクノロジーの進歩により、インターネット、IoT、ロボット技術、ドローン、そして人口知能（AI）といった最新技術が日常の生活でも触れることが多くなり利便性や効率性は格段に飛躍した。また、テクノロジーは、価値観や文化をも大きく変化させる存在になったと近年つくづく感じる。

一方、北海道では人口減少が加速し、広域分散・積雪寒冷といった地域特性が相まって、労働者や後継者不足、交通弱者などの課題が顕在化してきている。

縄文人は1万年以上もこの北海道の地に安住した。その間、自然災害や疫病など幾多の脅威と対峙してきたのであろう。しかし、きっとその時も、皆で知恵を出し合い、協力し、その脅威に勇気をもって果敢に立ち向かい、乗り越えてきたのだろう。

我々も、斧と石器からテクノロジーとアイデアへ持ち替え「北海道の明るい未来の実現」に向けて未来を切り開き、縄文人から受け取ったこの豊かな自然と魅力溢れる文化というバトンを、百年後、千年後の未来人に“最高のバトンタッチ”をしなければならない。

カックウが「がんばれっ」と、ほほ笑んだように思えた。

※「Lifestyles of Health and Sustainability」の略語で、直訳すると「健康的で持続可能な生活様式」

土偶女子・譽田亜紀子さん「私が縄文にハマったワケ」



【譽田亜紀子さん＊プロフィール】

岐阜県生まれ。2014年に『はじめての土偶』（世界文化社）を出版。土偶に逢うために遺跡にでかけ、その土地の人々と語り合い執筆活動を行っている。「土偶女子」としてファンが多い。北海道・北東北の縄文遺跡群の世界遺産登録に向けた盛り上げにも大きく貢献。現在、白老町で開催中の「ナチュの森で縄文にであう展」に企画協力中。北の縄文道民会議（東京支部）会員。

（聞き手：北の道民会議 甲谷恵）

— 譽田さんは、ずいぶん前から縄文の魅力を発信していますね。

2009年に土偶のえも言われぬ魅力に出会い、「土偶に肩をたたかれた」という感じで、ぐいぐいハマっていきました。土偶への見たままの思いを表現してみた『はじめての土偶』（世界文化社）という本を2014年に出版したり、土偶にニックネームをつけてみたりしているうちに、自分自身もますます土偶への愛が深まっていきました。

北海道との関わりは2015年から。大阪の書店でイベントをやったことを知った北海道庁のご担当者が、おもしろい人がいると、書店に問い合わせてください、書店から私に連絡がきたことから始まりました。北海道の方々が、縄文を楽しむ私に賛同してくれたことがとてもうれしく思いました。

その後、カックウの人形と一緒に北海道の世界遺産登録遺跡を紹介する動画制作に携わり、そのおかげで各地の学芸員さんにも出会えて、北海道が大好

きになりました。その動画はいつの間にか各国語にも翻訳されて世界に発信されていました(笑)

— どんどこに縄文の魅力を感じるのですか？

とにかく土偶が本当に面白かったし魅力的だったのです。1万年前の人たちがこんなものを作っていたのかという驚きと感動。そして、そのDNAを私たちが引き継いでいるというところに、人としての希望を見出した気がしました。

人は、特に産業革命以降、精神的なものや時間の考え方が変わっていったと感じます。縄文人は、人間が地球上にいる数多くの生物の一つでしかないことを知っている、決して頂点にいないわけではないことをよくわきま



えていると感じるのです。人間が一番人間らしく生きていた時代だと思います。今は、人間がのさばっているから地球が壊れていく、きっと縄文人の DNA はこれからの私たちが生きていく上でのヒントになるのでは・・と思うのです。

ー土偶への思いも聞かせてください。

土偶って何なのか？

私たち現代人は、いろいろなことに意義を見出そうとしたりストーリーを作りたがってしまいますが、縄文人は私たちの想像とは違う思いで作っていたかもしれないと思うのです。私は「その集団が考える見えない存在の具現的表現、超自然的存在の具現化」と言っています。ちょっと難しい言葉ですが、「精霊」みたいな感じです。そもそも人形(ヒトガタ)に見えるけれど人間ではなくて、遮光器土偶のような顔だったり、手が不思議なところから出ていたり・・彼らが感じるものが具現化されているのかなと思います。

また、遺跡や時期によって、土偶が出たり出なかったりする。土偶が出るのは、その集団に何か苦悩や社会的な困りごとがあって祈らざるを得ないから・・という先生もいらっちゃってとても興味深いと思います。精巧なものや稚拙なもの、よりパーソナルなものもあり、上手・下手ということでもないのかもしれないと考えたりします。

ー命の大切さも感じますよね。

とても強く感じます。「縄文人は争わない」というのは、生存戦略だったのでは？と思います。命を繋げるために、いかに合理的に自分たちが生きていくか・・と考えた結果じゃないかしら。もちろん腹もたつし小競り合いもしたかもしれませんが、命を絶つことは、人が減る、集団が維持できない、ムラが存続できないということにつながる。20歳まで生き抜くことすら大変で、目の前で子どもたちが次々と亡くなる現実があったのだから、自分たちで殺しあうなんてあり得ないことだと考えていたと思います。

ー北海道の遺跡で好きな場所は？

大船遺跡です。以前に訪れた時に、目の前に海が

広がり、遺跡のわきを流れる川にサケが遡上しているのを見て「こういうことだ！」と感動しました。あんなに深く掘った堅穴住居にも驚きましたが、あの強烈な土木工事をみんなでやった理由がああ場所にはあったのだと痛感しました。縄文人の意志や思いが感じられる場所です。

今回の北海道訪問で、シカがぴょんぴょん出てくる場面に遭遇したり、ご案内いただいたウポポイでアイヌの暮らしぶりを拝見し、自然との向き合い方についても改めて考えさせられました。アイヌの方々と縄文人の自然をリスペクトする気持ちは、とてもつながっていると感じました。学問的にということではなく、「人」としての本来的な生き方が共通するということです。

「自然との共生」という言葉がありますが、私はとてもおこがましいと思っています。自然と人を同列に考えているのは、とても上から目線。先般、マヤ文明のことも学び本を出版しましたが、マヤの人たちも縄文人も自然を征服しようなんていう気持ちは全くなく、神様からどれだけ加護をいただくか、気にしてもらえるかということを大切にしている。圧倒的に大きく深い「自然」に対しての「人間」の小さい存在を知っているのですね。



大船遺跡（函館市）。2mの深さの堅穴住居跡

ー3月から始まった「ナチュの森で縄文と出会う展」が話題となっていますね。

ナチュラルサイエンスの皆さんが、縄文展の企画にあたって、コンセプトをあれこれ検討しているときに、私の本『知られざる縄文ライフ』（誠成堂新光社）に出合ってビビっときたと言われて、とても光栄に思いました。私が道民会議の会員だったこともあり、つなげていただきましたが、とてもご縁も感じます。実際に、本の中の世界が素敵な空間となって再現されているので、テンションあがりました。

7月と8月に、トークイベントも企画していただいています。



著書『知られざる縄文ライフ』に登場する竪穴住居で楽しむ譽田さん。スタッフの皆さんが段ボールで手作りし、縄文ワールドを再現！

ー北海道の縄文ファン、これからファンになるみなさんへメッセージをお願いします。

昨年、北海道博物館で開催されていた「北の縄文世界と国宝展」はとても賑わっていて、素晴らしかったです。観光客の方々はもちろん、道民の皆さんも熱く楽しんでいらっしゃると感じました。

やはり、実際に土偶をみたり、遺跡にいったりすることはとても大切なことだと思います。

私は遺跡に復元されたものがなくても、その地に立つだけでいろいろと妄想できて楽しいのです。何もないところでも、空や星や山や海や川を見ながら、「自分は縄文人」というスイッチを入れてみてください。縄文人の暮らしを想像し、縄文人になりきることで感じることがあるはずで、何人かでいくと人それぞれの感じ方があってさらにオモシロイのです。ぜひ、一緒にたくさんの妄想をしましょう。

【インタビューを終えて】

縄文をぐっと私たちの近くに引き寄せてくれたのは、譽田さんの本。土偶にニックネームをつけるという奇抜な発想の裏側には、土偶へのあふれる愛と、人として大切なものを知っているという「縄文人」へのリスペクトを強く感じました。私たちの『縄文女子の妄想トーク』は、まさに譽田さんが原点なのです。（甲谷恵）



ゲートにくぐると広がる縄文の世界



「森の工舎」は
旧虎杖中学校



本の世界が再現された空間

ナチュの森で縄文にであう展

会期: 2024 年3月15日～9月30日

場所: ナチュの森(白老町)

主催: ナチュラルサイエンス

※北の縄文道民会議も後援しています。

＜イベント情報＞

●7/14⑩ 10:30- ワークショップ(小3-)

土器や石器に触れて縄文文化を学んでみよう

●7/14⑩ 13:30-14:30 展示こぼれ話トーク

譽田亜紀子×宮田麻貴子×菅野修広

●7/28⑩ 10:00-11:00 ジョーモン隊ワークショップ

カクウの観察(夏休み自由研究)

●8/10⑩ 縄文太鼓茂呂剛伸さん野外演奏会

●8/25⑩ 10:00-11:00 ジョーモン隊ワークショップ

カクウの謎を探ろう(夏休み自由研究)

●8/31⑩ 譽田亜紀子×阿部千春先生トーク

※このほか、ドニワ部、いるば28のポップアップショップやワークショップなども随時開催中！

9月末には土器づくりと野焼きも企画しています。

詳細はこちら



縄文の「基本のキ」が学べます。



弓矢体験は大人も子どもも夢中に。



レストランでは縄文ピザ